〈東京地区図書館見学記〉

東京地区図書館見学会レポート

文学部国文学科　岸　本　　彩

中村百合子先生、宇治郷毅先生の引率で2009年９月16日と17日の二日間にわたって開催された、東京地区図書館見学会に参加した。

一日目の朝、まず初めに横浜市中央図書館を見学させて戴いた。市立の図書館とは思えないほど広く、平日の朝にも関わらず多くの利用者がいたことに驚いた。

図書館の概要を説明していただいた後、地下３階の書庫から順に上へと案内して戴いた。地下２階にはベルトコンベアのような資料を運搬する機械があり、カウンターで請求された資料はこの機械を使用して送るそうである。こうして貸し出される資料は、貸出資料数全体の約半数にも及ぶそうである。またこの階には約3000タイトルという膨大な雑誌も所蔵されている。雑誌で中央図書館以外の横浜市の図書館しか所蔵していないものは、中央図書館に集約されるという体制になっているそうで、中央図書館は県立図書館の様な役割を果たしていると感じた。

地下１階はCDやビデオの視聴ができるコーナーが用意されているが、雨の日等はホームレスの方が多く席を占領することが問題になっているそうで、酒気帯びでの入館を禁止するといった対策を練っておられるそうだ。またこの階では郷土資料の保存も行われ、その中でも貴重書の９割はデジタル化されているそうだ。

地上１階はメインカウンターが置かれ、貸出は全てここで行われている。AEDや電光掲示板が設置されており、これに対して市民から無駄遣いとの意見があったそうだが、広告を流す条件で企業から提供されたもので、税金は使っていないそうである。数年前に話題になったコピーサービスの現状も説明して下さり、図書館サービスを非常に柔軟に行っておられると感じた。

２階は事務室になっており、相互貸借等の資料の仕分けで混雑していた。地形を利用し、２階にも出入口があり、ここを出た所の駐車場に移動図書館「はまかぜ号」が駐車していた。２階に駐車場を設けることで、資料の運搬が行いやすくなっているようである。

３・４・５階は主題別の開架になっている。地域資料に図書館オリジナルのパスファインダーが多く用意されていることや、３・４階の中心にわかりやすくレファレンスカウンターが置かれていることが新鮮であった。また外国語の資料も積極的に収集しておられて、その幅広さに驚いた。４階のバックヤードでは資料の装備が行われている。ここでは市内18館の分を全て受け持っているそうで、多くの職員の方が黙々と作業をしておられた。

全ての階を見学させて戴いた後、再度職員の方とお話するお時間が戴けた。その中で、司書で管理職になる人は少なく、市内の18の図書館の館長は全員司書ではないということを教えて戴いた。そこで改めて、今まで見てきたような優れたサービスをこの図書館が提供できるのは何故だろうと考えさせられた。貸出や対面朗読サービスを始めとする障害者サービス、多文化サービスなどの基本的なサービスを行う堅実な地盤があることで、その他の問題や課題に対して状況に合わせた柔軟な対応が取れ、自治体へのアピールも上手くできるのではないのかと思っ

たが、やはり一番の理由は図書館の役割を熱心に考えておられる素晴らしい職員の方が多くおられることではないかと思わせられた。

昼食を中央図書館から歩いてすぐの神奈川県立図書館でとり、食事後少しの間館内を自由に見学した。市立中央図書館を見学した後であったからか、県立図書館の役割について考えさせられる機会となった。

県立図書館を後にして、午後は巣鴨にある福音館書店へと向かった。ここでは、相談役であり創設者でもある同志社の大先輩、松居直さんから直接お話しを伺うことが出来た。松居さんは福音館書店の設立の経緯や、どのように絵本雑誌を浸透させていったか、絵本はどうあるべきかといったことをお話しして下さった。絵本を横書きで書いたり、本の大きさを内容によって変えるといった、今では当たり前のことも昔は破格なことで､図書館や本屋からクレームを受けることもあったそうである。クレームを受けながらも、子どもにとって面白い絵本を出すことを続けて来られたお陰で、私たちが素敵な絵本の数々に出会うことが出来たのだと思うと､非常に感慨深く､松居さんを始め当時の編集の方にお礼が言いたくなった。

松居さんからお話を伺った後、各編集室を見学させて戴いた。中でも「こどものとも」の編集室では、来月発売される号の制作過程を紹介して戴いた。企画から製本まで、多くの時間と工程があることがわかり、また絵本作家の方のアイデアに驚くばかりであった。編集室を見学してから、海外で翻訳する際の権利交渉を行う部や資料室も案内して戴いた。職員の皆さんはお仕事中にも関わらず私たちを明るく迎えて下さり、本当に素敵な会社だと感動した。

福音館書店を出て、ホテルへと向かった。夕食には同志社大学司書課程 OB で、文教大学湘南図書館に勤めておられる中村保彦さんも来て下さった。中村さんは「図書館雑誌」の編集委員でもあり、「図書館雑誌」の裏側や湘南のことなど大変面白いお話を伺うことが出来た。

翌２日目はホテルから上野公園を散策しながら、まず国立国会図書館国際子ども図書館へと向かった。国際子ども図書館は帝国図書館であった建物を、安藤忠雄さんの設計で増築したもので、非常に美しい建物である。館内ではまず１階にある、毎週土日におはなし会が行われる部屋に案内して戴いた。ここで行われるおはなし会は、子どもにおはなしの世界に集中してもらうため、保護者は入室できないそうだ。同じ階には「子どものへや」という絵本や調べ物の本が置いてある部屋や、「世界を知るへや」という世界の地域ごとの歴史・文化・文字・昔話の資料を集めた部屋などがある。「子どものへや」は天井全体が照明になっており、子どもが手暗がりを気にせず好きな所で本を読むことが出来るようになっている。また書架の上段は極力使わないようにしたり、調べ物の本は子どもの生活圏の公共図書館でも応用できるように NDC で分類したりと、利用上の様々な工夫が凝らされている。子どもの目線の高さにある窓には、季節感のある飾りが施してあり、楽しく過ごすことが出来るようにも工夫してあるようであった。

２階は18歳以上で利用できる資料室になっている。ここでは教科書や指導書、児童文化の本などが開架にあり、国際子ども図書館の保存のための図書館という一面が見られる。資料室の資料は NDC ではなく NDLC で分類しているそうだ。

続いて書庫にも案内して戴いた。書庫で目に付いたのは、学校図書館へ貸出する資料のセットである。１セット50冊で構成された、世界の地域ごとのセットがずらっと並んでいた。このセットは１ヶ月間貸出できるそうだ。このようなサービスを行っていることは知らなかったし、職員の方ももっと利用が増えてほしいと仰っていた。

３階は企画展が行われるホールと展示スペース、メディアコーナーがある。メディアコーナーではデジタル化された貴重書がタッチパネルで見ることができた。

親子連れが多く来館されていて、地域に浸透している印象を受けたが、それも分類や部屋の設計、魅力的な企画など細やかな所まで工夫されているからではないかと思った。

午後は国立国会図書館を見学させて戴いた。入館の際には申請が必要で、駅の自動改札の様な機械が入口に設置してあり驚いた。予想以上に一般の利用者の方が多かったのが印象的で、多くの方が利用に慣れておられるようであった。閲覧室の中の区切られた場所には専門の情報室があった。ここは許可がおりないと入室できないそうだ。続いて地下の書庫に降りた。エレベーターから降りるとまず書架の列に圧倒された。端から端までは目が霞むほど遠く、さらにこの広さの書庫が８階分もあるということで、さすが日本の図書館の最後の砦だと感動した。書庫内では、漫画雑誌の創刊号やマイクロフィルムを保管している機械等を見せて戴いた。館内を周った後は国立国会図書館を紹介した映像を見せて戴き、その後職員の方とお話するお時間を戴いた。その中でやはり国立図書館としてよりも、国会図書館としての性格が強いという印象を受けた。それでも一般の利用者が多く来館されているのも目の当たりにして、国立国会図書館の偉大さを実感できたように思った。

全ての行程を終えて中村先生から、この見学会で周った図書館の中でもし働けるならば何処で働きたいか、という問いかけがあった。そこで今一度各図書館や福音館書店のことを思い浮かべて、２日間で本当に特色のある図書館や会社を見学させて戴いたと実感させられた。私は横浜市立中央図書館と答えたが、皆の意見はまとまらず、それぞれが見学させて戴いた所にそれぞれの魅力を感じていたようだった。そして、そのことがこの見学会が充実していたことの証なのではないかと感じた。首都圏の人の多さに少し疲れたが、それ以上に勉強になり、刺激を与えられた見学会だった。

最後にこのような機会を与えて下さった、中村先生、宇治郷先生を始め、横浜市立中央図書館の皆さま、福音館書店の皆さま、中村保彦さん、国立国会図書館国際子ども図書館の皆さま、国立国会図書館の皆さまにお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。